

## 地域の比較研究と歴史地理学の立場

木村 宏

本稿で取扱う地域の比較とは、明確に云えば二地域の総合的な比較と部分的な比較とに分たれる。

この場合、二地域間で自然環境が相類似し、その文化現象、文化景観を互いに比較する方法と、文化現象、文化景観が相類似し、その結果、自然環境を相互に比較する方法と二通り考えられる。

しかし、一般に地理学上で二地域の比較と云った場合には先ず前者、即ち自然環境が相類似し、その文化現象、文化景観を互いに比較する方法を上げられねばなるまい。

二地域の自然環境が互いに相類似する場合、ようやく総合的な比較に歩を進めることが可能なものではなからうか。尤も、地理学では山地村と平地村、と云った文化的要素複合を基とする一般地域の比較的方式<sup>①</sup>も採用される。

しかし、総合的な比較研究に進めるにあたっては山地村と山地村、平地村と平地村との比較研究がより合理性が保たれるのではなからうか。従来の比較という概念が未だ明確に分類されていなかったように思われる。

N. Krebs によれば、その著 *Vergleichende Landerkunde* 中においてアジアモンスーンが吹きつけるという共通の自然環境下において、シナ文化とインド文化と二大文化の比較がなされている<sup>②</sup>。

つまり、比較地誌学的方法としては二地域の或程度の自然環境の類似ということが前提条件とならねばならぬ。今回、二地域の比較研究と歴史地理学の立場と題する論文を草するに当り、狭いながらも、この自然環境の相類似した二地域の比較ということの問題にしていることを先に述べておきたい。

## 二

次に二地域の比較研究とは、部分的な比較と総合的な比較とに二分して考えられる。二地域の部分的な比較というのは、例えば、地形、土壤、気候、植物、集落、交通等と地域の一構成要素をもって二地域間を比較することである。カール・リッターの粗朴な比較地理学的研究方法はここではしばらくおくとして、従来の比較研究と名付けた論文にかなりかような一〜二構成要素をもって地域を比較することが多く見られた。また比較研究と名付けた論文が此の程度に終るのも地域調査の限界、不十分な段階にあった時期においては止むを得ないことであつた。

拙稿、「地域構造の比較地理学的研究」人文研究第五巻二号中で述べた如く、各地域の構成要素中、支配的な要素をとり上げ、比較することにより効果があるが、これは総合的な比較研究の範疇に入る。シュペートマンのいわゆる動態地誌的な把握はこの比較の出発点とも云えるであろう。地域の比較研究の際、その構成要素の抽出の方法については N. Krebs の比較地誌学的方法（明らかに比較地誌と名付けている）が参考とされねばならないと思う。

彼は一応 Klima, Boden, Relief, Lage, Vegetation, Pflanzungen, Menschheit, Rassen, Voeker, Religion, Wirtschaftstform と、最後に二地域の文化景観の比較で終つてゐる<sup>③</sup>。

## 三

二地域の比較研究を完全に行うには先に一端を述べた如く、部分的、断片的に止らず、総合的に行わねばならない

が、實際上、これを行うには二地域間のあらゆる構成要素の上に詳細なデータが用意されていなければならぬ。

この用意がなくては二地域間の比較要素を見出すことも困難であるばかりでなく、比較そのものが単なる部分的、断片的な比較に止ってしまう恐れがある。

例えば、フィリピン群島においてルソン島とミンダナオ島を比較する際、中央大平原はセンサスのデータが良く揃い、数的にも質的にも詳細に構成要素を把握、分析することが出来るが、これと自然環境が相類似し、比較研究が可能なミンダナオ島コタバト平野の場合は余りにもその差異が甚しい。コタバト平野では現在、尚、入植者が開拓中で、実地調査も不十分、勿論、農作物の栽培状況も試験の段階にあるものが多い。

次に二地域の文化景観の比較に関しては、先ず二地域間の文化景観の過程、推移を比較すれば、二地域の性格を最も明瞭に描き出すことが出来る。しかし、地域の文化景観の過程、推移の比較には先ず各地域を構成している要素を抽出し、(それは景観の基礎構造をなすものであるが)その要素毎に相互間の比較を試み、後、地域差に強度に作用する要素を見出せば、その要素間の比較(指導的比較要素と名付ける)がよく文化文化景観の過程、推移の比較を可能にし得るであろう。この場合、指導的比較要素とはシュペートマンのいわゆる空間的にも時間的にも相関連し、継続し合う Herrschende Element ⑥ そのもの、或いはそれに近いものでなければならぬが、二地域間が一見、文化的に余りにも相異していると考えられる場合、比較要素中、相似している要素を順次打消してゆき、次第に残ってゆく要素が地域差に作用している強度な要素であり、その強度な要素中より先述の空間的にも時間的にも相関連し、継続する Herrschende Element そのもの、或いはそれに近いものをえらんで指導的比較要素⑥とせねばならないであらう。

拙稿「土地所有形態より見たるフィリピン群島の地域性」人文研究 第四卷三号中で述べた如く、日本列島とフィリピン群島とを比較する場合にはその指導的比較要素中に土地所有形態の見逃せぬことを強調した。Krebs は比較上、考慮すべき要素として経済形態をあげているが、経済組織、形体中でも土地所有形態の占める位置が特に高いことを述べておきたい。これは云うまでもなく、アジア・モンスーン地域で同じく米作地帯であり、かつてアジアの家長的共同社会生産様式で生産される。土地の私有、共有という点で一応、共通している。しかもその永続性、空間的には農業経営のみならず山林は勿論、あらゆる土地利用方面に関係する。指導的比較要素としては土地所有形態なる要素が如何に重要な因子であるかを特に述べておきたい。

N. Krebs によれば、先述の如く、二地域間の比較の際、先ず考慮すべき比較要素として Klima, Boden Lage, Relief, Vegetation, Pflanzungen, Rassen, Volker, Menschheit, Religion, Wirtschaftsform, 等をあげ、最後にこの比較に及んでいるが、考える静的な要素として Klima, Boden, Lage, Relief, Vegetation, 動的な要素として Pflanzungen, Rassen, Volker, Wirtschaftsform 等の比較要素を相互間に比較検討しつつ進められねばなるまい。

この場合、Lage の問題、データの制約は多くの疑問を提出する。即ち、文化景観の過程、推移の比較には、当然、歴史的变化を考慮にいれねばならぬが、それには自らデータの制約その他より比較に当った地区以外のデータによらねばならない。拙稿、「ルソン島カガヤン平野とミンダガサオ島アグサン平野」人文研究第七卷九号中にルソン島南東部山系、南東部火山地域とミンダガサオ島サンボアンガ高地との比較に際しては余りにも地区外の歴史的变化を証する資料を必要とした。また比較が他の地区に拡大するにつれ、相連関して、考察に関してはより深く内部に達することが出来る。この場合、各地区の比較が進むにつれ、次第に歴史的考察を重視してゆかねばならなくなる。従っ

て、比較において歴史的考察の占める割合は各地区により差があるのは云うまでもないが、それと同時に地区の拡大つまり空間的な拡大を増すにつれてもまた飛躍的に増大することは認められねばなるまい。

#### 四

二地域の総合的な比較研究に近づくための道程として地区の歴史的变化過程把握に際しては質的よりもむしろ量的な差異を見逃さぬことが特に肝要なことである。

歴史学プロパーによる研究成果がややもすれば量的な表現に乏しく、質的な表現に重点を置く場合が多い。

比較研究上、地域という空間的な広りを有している対象を歴史的に扱うのであるから、その変化過程把握に際しては(資)史料に制約され一地点、一区域に限定されることに止むを得ないとも云える。しかし、地域の比較に際しては比較対象を一地点、一区域に止まらず地域的に一定の広りに求めねばならないのである。従来、村史、町史と名付けられ、一集落、もしくは一行政単位上の区域の歴史が編纂された。ところが歴史地理学者が、苦心して協力した××扇状地の開拓過程 ○○流域の開発、△△盆地の人口分布の変遷等の研究成果を全面的に採用したものは少く、大部分、一豪族の系譜より行政・教育その他、人事関係もしくは産業その他の部分的な発展を記述したものが多かった。かような歴史地理学者の扱ったテーマ中に、先述の地域の歴史を扱った報告が大部分見出されるのであって、此のような成果を期待しているのである。

一集落や一地区、一交通路の歴史を明らかにするのみでなく、地域の歴史を明らかにすることが必要で、一定の広りを有する範囲の歴史こそは歴史地理学者の当然、果たすべき役割と云えよう。(かような研究成果は国内においては既に熱心な研究により着々進められているので一一列举はしないが、アジア、特に東南アジア方面の研究では特に痛

感する点が多いので特記している次第である。

しかし、實際上、これを行うことは甚だ困難で、或一定の時代をとり上げ、その時代内で境域その他の範囲、地域を考察し、(資)史料の制約を地理的環境、現在の地理的事情で類推し、補足しつつ進められねばならぬ。

地域の歴史が明らかになって、始めて、地名考証も完成の域に達し、その個々の地名、交通路、航路等、一地点、一区域等の歴史的考察がその生命をあたえられ、躍動してくることになる。またかくして始めて総合的な比較研究を行う際の基礎づけが完了することにもなる。

拙稿「麻逸と蘇祿の境域について——東南アジア東部島嶼地域の歴史地理学的研究——」中に、境域を扱うことに関し、その必要性和同時に極めて慎重を要することを述べた。即ち、従来の史学研究が一村落、一交通路、一都市の歴史を編年的、発展的、縦貫的に把握してきた。これが歴史学的方法である。ところが空間的に拡りを求めるにおいては部分々々の間に間隙が生じてくる。又、個々の例えば一交通路の歴史の変遷を明らかにする際にも区間資料の粗密や、時代的にかなりへだたっている場合が多い。そこで単に地域の歴史と一口に云っても、研究上、非常な困難を伴うのである。

地域の歴史を明らかにすることは、比較考察の一基盤になると云える。しかし、同時に地域の比較考察が進められることによって、また二地域の歴史的類推をも可能にし、地域の歴史を明らかにする効果も少くはない。例えば、航路に関して、自然環境の類似、台風の通過区域とか暗礁、岩礁地帯等の障害より推測を始めれば、或程度の文化景観の一部の推測も不可能ではない。

拙稿、「麻逸及び蘇祿の境域について」中において麻逸と蘇祿を明らかにせんとつとめるに、先にルソン島とミンダ

ナオ島の部分的な比較研究を進めていたので、その地域差が重要な(資)史料欠如地区を補うに役に立ったことは否定出来ない。Krebs のようにインド文化とシナ文化の比較の様な亦りにも巨視的なことはここで省く。ただ同じくアジア大陸東辺、太平洋に臨む日本列島とフィリピン群島とを合せ考える時、たとい、比較研究が個々の群島内、列島内で行われても、その地域の歴史的考察は世界史と連関している。従つて、フィリピン群島内の二地域の歴史学的考察といつても、世界史的巨視的立場を必要とする。同じく日本列島内において比較研究が行われる場合も同様である。しかし、世界史的立場から眺める際、注意すべきは各地域にはまたその点で地域差が生じてくることである。ルソン島は一時、回教徒に征服されたが、結局はスペインのカトリック教徒により追われ、ミンダナオ島が回教の基盤<sup>⑤</sup>として残つた。同じくスペインが世界各地に植民地を設けたが、ここにも大きな地域差が生じているのである。また、ヒンズー文化の伝播は、ミンダナオ島に先ず滲透し、ビサヤ諸島にも及んだが、ルソン島北部には殆んど達しなかつた。東南アジア大陸、半島、島岐地域に広く分布したヒンズー文化であつたが主にビサヤ諸島附近<sup>⑥</sup>で止つたことは注目されねばならない。

また台風の影響が後期マレー族の北進をしばしば阻み、ビサヤ諸島南辺までたどりついた種族の一部が定住生活をしばしばおびやかされるので、ボルネオ島北部に逆戻り<sup>⑦</sup>させられたことも、地域の歴史的考察が、十分、進められて始めて明らかにされることである。民族、種族の移動が必ずしも進むばかりでなく、或時は逆転し、或時は回転することも考えねばならず、この場合も台風の影響という自然環境の因子を意外に重視せねばならない。かような理解も地域の歴史的考察が完成して始めて明確な結論が下せるのである。J. Fedure の説に反駁する<sup>⑧</sup>のではないが、地理的可能性なるものも、各地域により、長短様々の時期があつた。従つて、その時間の差は先述の文化景観の過程、

推移の速度、量的な変化を重視する故なのである。

地域の比較研究には一見、分析的に比較してゆくことは可能な様であるが、歴史的变化を分析する場合に種々の困難がともなう。それは経済形態にしても、土地所有形態にしても、相互間に接触や、関係のない事項は、比較する際、不能な場合もあり得る。従つてその場合、しばらく、比較要素中より省く他はない。

## 五

二地域を比較する際、Krebsの方法では最後に Kultur の比較を行うことは先に述べた。例にヒンズー文化をあげて、これに関し、歴史地理学としての立場を明らかにしたい。

ヒンズー文化の影響が各地域に如何なる程度に滲透したか、これは既に明らかにされている地域もあるが<sup>⑥</sup>、各地域に及ぼすことは実現困難な問題である。

ヒンズー文化の滲透も、決して順調に一線を進むものではなく、各方面から、しかも或時には進み、或いは退き、遠回りして達してゆく場合もある。またヒンズー教徒の進出も何を目的として進んでゆくかと云うことも地域によっては区別されねばならない。即ち、地域によっては金の獲得を、また布教第一の目的としたり、種々に變つてくることも想像される。ヒンズー文化の最大特徴はそれが金文化の發達と大いに関係がある<sup>⑦</sup>と云うことである。金文化が發達している地域、尤も例外の地域も多くあるが、少くとも東南アジア地域においてはヒンズー文化が、直接或いは間接に、何等かの形において具現<sup>⑧</sup>されている。フィリピン群島においてもミンダイオ島ブツアン附近に既にヒンズー文化の影響が一〇世紀以来及び<sup>⑨</sup>、ヒンズー教徒達が金を求めに何度も往復している。ここにルソン島とミンダナオ島を比較する時、ヒンズー文化の滲透という点において、大なる地域差を有しているわけである。

かような地域差が原住民の生活慣習土地の利用、開発、交易、交通の発達程度より集落の形態にまで大なる影響を及ぼすわけであり、しかもヒンズー文化の滲透程度を測定することは明らかに歴史学的方法<sup>⑥</sup>を、延いては先述の歴史地理学的方法が大いに採用されねばならないのである。

ここに地域の比較研究に対する歴史地理学の重要な任務がある。立場がある。この任務、立場を良く認識して、地名考証、交通路の復原、ひいては地域の歴史、沿革、地域の歴史を明らかにしてゆくことが、より目的を明確にし、自ら、その意義を明らかにするものと思う。従つて、これが決して歴史地理学の目的などと云っているのではない。目的は更に大きく考えらるべきであらう。ただ今回とり上げたのは二地域の比較研究に際し、歴史地理学の取るべき任務、立場、目的を明確にせんとつとめたまでであつて、この点を充分、認識して戴きたい。

#### 主要参考文献

- ① R. Hartshorne : the Nature of Geography ハーツホーン 地理学方法論 野村正七訳 三六〇頁
- ② N. Krebs : Vergleichende Länderkunde 1952 S. 439—450. インド文化圏とシナ文化圏の比較より始めている。
- ③ N. Krebs : a. a. O., S. 5—S. 7
- ④ H. Spethmann : Dynamische Länderkunde 1928.
- ⑤ 拙稿「地域構造の比較地理学的研究」人文研究第五卷二頁五一頁中で好めて名付けたものである。
- ⑥ C. Benitez : History of the Philippines. 1929.
- D. P. Barrows : Hirtory of the Philippines. 1926. P. 102—108.
- ⑦ O. Beyer 氏によれば「ヒンズー島北部は未だヒンズー文化が及んでいなかった」と。(C. Berley : 前掲書所収)

- ⑧ Hose, Ch & W. McDougall : the Pagan tribes of Borneo. 1913. P. 253—255.
- ⑨ L. Febvre : La Terre et e'l' Evolution Humaine, Introduction Geographique e'l' Histoire. 1922.  
translated by E. G. Mountford and J. H. Paxton : A Geographical Introduction to History.
- ⑩ G. Coedes : Histoire ancienne des Etats hindouiser d' Extreme-Orient. Hanoi. 1914.  
山本達郎紹介 東洋学館 三一巻三号
- ⑪ G. Coedes によればインド人の移住発展を商業性質のものとなし、特に東方に金をめる意図の多かつたことを重視している。
- 鹿野忠雄著 東南求亜細亜民族学先史学研究 七〇八頁中で金文化の北進について述べている。
- ⑫ O. Beyer : the Philippines before Magellan. Asia. (1921) Vol. 21. No. 10~11.
- ⑬ O. Beyer : *ibid.* 氏はフィリピン群島南部の金文化は同地の鉄器時代に発達し、その年代に A. D. 五〇〇—一〇〇〇年頃と述べている。
- ⑭ ヘルンハイム「歴史研究法教程」 小野鉄二訳「歴史とは何ぞや」 大類 仲著「概論歴史学」等を主に参照。  
H. Hassinger : Geographische Grundlagen der Geschichte. 1953.